

二〇一四年度入学試験問題 (第一回・午前)

国語

★注意事項★

- ① この問題用紙は、13ページあります。「はじめ」の合図があるまでは開かないこと。
- ② 解答用紙はなかにはさんであります。受験番号・氏名を必ず記入すること。
- ③ 解答はすべて解答用紙に記入すること。
- ④ 印刷が不鮮明だったり、ページがぬけ落ちたりしているときは、すぐに申し出ること。
- ⑤ 「やめ」の合図があつたら鉛筆を置き、先生の指示にしたがうこと。

1

あとの問いにそれぞれ答えなさい。

(1) 次の①～⑤の——線の漢字のよみをひらがなで答えなさい。

- ① 東の空が白んでくる。
- ② 妹はよく気が利く。
- ③ 犬の行方をたずねる。
- ④ このあたりは金物屋が多い。
- ⑤ 再来年には完成するだろう。

(2) 次の①～⑤の——線のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 友人と親しくマジわっている。
- ② こどもはオモテで遊びなさい。
- ③ 祖父の職業をツぐ。
- ④ 試し刷りをコウセイする。
- ⑤ 弟はコウガク心にもえている。

- (3) 次の①～③の文の にあてはまることばを、問1～問3の条件にあわせて、あとの から選り、記号で答えなさい。

① 一生けん命練習した。 、コンクールは二位だった。

② 昼食は、ハンバーグ カレーを食べよう。

③ パリに着いた。 、ルーブル美術館に行こう。

問1 ①文で、(a) 二位になって、うれしいという気持ちを表す場合。

(b) 優勝できなくて、残念だという意味をこめる場合。

問2 ②文で、(a) 食いしんぼうのA子さんの場合。

(b) なかなか決まらないB子さんの場合。

問3 ③文で、絵がだいすきなC子さんの場合。

ア	または	イ	けれど	ウ	なぜなら	エ	さらに
オ	つまり	カ	要するに	キ	では	ク	それで

- (4) 次の①～③の文を読んであとの問いに答えなさい。

① ア 姉の目が おもいなしか きらりと 光った。

② ア 私は「二度と あんな 危険な ところへ 行きたくない。」と 思った。

③ ア 夜のやみに、 青い キラキラ 光る ランプも 吸いこまれた。

問1 ①文から、ア「姉の目が」に対する述語を選び、記号で答えなさい。

問2 ②文から、(a) イ「二度と」が直接かかる(修飾する)語を選び、記号で答えなさい。

(b) キ「思った」に対する主語を選び、記号で答えなさい。

問3 ③文から、(a) ア「夜のやみに」が直接かかる(修飾する)語を選び、記号で答えなさい。

(b) イ「青い」が直接かかる(修飾する)語を選び、記号で答えなさい。

2

次の文章は、探検家の筆者が、犬ぞりによる北極圏の単独行に成功したときの記録文の一部である。これを読んで、あの問いに答えなさい。(字数については、「、」や「。」も一字に数えます。)

一月二十四日

犬の逃亡により、すべての犬を一瞬にして失った私は、北極圏の暗闇と寒気と氷の中に取り残された。目的のむらまで歩こうと決心し、そこから荷物を下ろそうとした時、アンナ（リーダー犬）が五頭の犬を連れて帰ってきた。その後、十三時間かけてやっと目的地にたどり着き、海岸にテントを張って、すぐに眠りに落ちた。（注：犬ぞりは、氷の張る期間だけ使用できる。冬期、北極圏は一日中太陽を見ない日が続く。）

テントの外でエスキモーの子供たちが騒ぐ声で目が覚めた。六時間も眠っていなかった。横になったまま、テントの低い天井を見ながら昨日のことを考えた。もし六頭の犬が戻っていなかったら、もし薄氷が割れて海水に落ちたら、自分はどうなっていたか。私は恐ろしくなった。

これからどうするか。とても先の見通しは立たないように思われた。ヤコブスハウン（地名）出発以来、一カ月の間に、あまりにも次から次へと予期せぬ危険に出会いすぎた。海が結氷していないという悪条件、二度にわたる山越えの苦闘、犬の食糧の欠乏、暗黒、すさまじい寒気に順化していない私の体、そして犬の逃走。わずか一カ月の間にこれだけのことがあつては、これから先何が待ち受けているかわかったものではない。いつまでも幸運が続きまとうとはかぎらない。どう考えてもこれ以上旅を続けることはできない。もし

A

のなら、もうこの旅は中止すべきだ。

私はフラフラとテントを出た。町へ行って缶入りビールを半ダース買った。またテントにもぐり込み、一本のビールを一

気に飲んだ。何もかも気に入らなかった。テントの外で騒いでいるらしいエスキモーもうとましかった。

コペンハーゲン（地名）を出発するとき、今度の旅の間はアルコールをいっさい口にしないという誓いを自らに立てた。極地の旅を成功させるためには、アルコールは禁物なのだ。だが、もうどうでもいい。二本、三本とまずいビールを飲むうちに、涙がポロポロ出た。泣いてもしかたがないことだとはわかっていても、涙のほうで勝手に出てくるのだ。自分としては一所懸命やってきたつもりだった。だがこれ以上続けると、生命を落としてしまう。自分自身に向ってそう言い訳をしなから、私は苦いビールを飲んだ。

I

何時間たったか、目が覚めると石油コンロが消えていて、寒さにふるえた。かじかむ手でコンロに火をつけた。ビールの酔いはとれていたが、頭痛が残った。

II

深い静寂があり、ときおり風の吹きぬける音だけが聞えた。私は暖かいコンロの火を見つめながら、過去のことを思い出していた。これまでも単独登山や単独の冒険行で、テントの中や雪洞の中で待機しなければならぬようなとき、私はよく過去の想い出にふけり、それが一つの癖になった。それは単独行にのみ許される、楽しく、ときには甘美でさえある時間だった。今、楽しい想い出にふけているような状況ではなかったにもかかわらず、なぜか過去の出来事が次から次へと

脳り（頭の中のこと）によりがえってきた。

III

ケニヤのジャングルの中を、ピッケルをやりのようにかまえ、案内の黒人青年とヒョウにおびえながら登った。（中略）エベレスト、頂上まであと五百メートルというときの緊張と息苦しさ。厳冬期のグランドジョラスの北壁登はん。地獄のような寒さと飢えだった……。

IV

すべてがつい昨日のことのように、鮮明なイメージとなつて頭の中を通過していった。

V

『少しずつ、体の中に勇気がわいてくるようだった。俺は今と同じくらいきびしい場面に耐えてきたではないか。危険を

乗り越えてきたではないか。状況がきびしいという理由で、今ここで旅を中止すればどうなるか。大うそつきとまではいわれないにしても、今後俺が考える冒険のプランは、だれもまともには聞いてくれなくなるだろう。俺の今後の夢はそれがどんなものであれ、実現はきわめてむづかしくなるだろう。

明日行動したからといって、俺は死ぬわけではない。俺はまだほんとうに死に直面していないのだ。旅を中止するのは、それからでも遅くはないはずだ。もう一度、犬を補強して新しいチームをつくってみよう。一日一日を力いっぱいやってみて、それでもダメだったらあきらめればいいのだ。

私は我に返ったような気持ちで、^⑧どん底の状態から抜け出した。弱気はいつのまにかぬぐい去られ、ふたたび血がくるのがわかった。たぶん私はあまりにも疲れすぎていただけなのだ、と思った。』

(植村直己「北極圏一万二千里」より。一部表記を改めたところがあります。)

* エスキモー……極北地方に住み、狩猟・漁労で生活する人びとのこと。本文では、原文を尊重し、表記はそのままにしてありますが、現在のこの語はさけられるようになり、カナダでは「イヌイト」が公的に用いられ、その他の地域では「エスキモー」、「カラーリット」などの名前がある。

問1 文中の

 ・

 にあてはまることばを、それぞれあとから選び、記号で答えなさい。

—
ア 大うそつきと言われたくない イ 冒険を成功させたい
ウ 生きてかえりたい エ 今後の夢を人に語りたい

— (ア 通って イ にじんで ウ のぼって エ 引いて オ 燃えて)

問2 — 線①「自分はどうなっていたか」とありますが、具体的にはどのような結果が予想されますか。簡単にまとめなさい。

問3 — 線②「何もかも気に入らなかった。エスキモーもうとましかった」とありますが、そのように感じたのは、筆者がどんな状態にいるからですか。最も良いと思うものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 旅の中止は当然だと思うが、今までの努力が無意味になるので、もうどんな努力もする気になれないという気持ちでいるから。

イ 旅を続けることは難しいが、中止はくやしく、自分にできることはもうないと思い、投げやりな気持ちになっているから。

ウ 条件が悪すぎてこの旅は中止するしかないが、どんな言い訳も納得できないことから、無力感を感じてしまっているから。

エ 旅を中止したくないが、全ての条件を考えるとこれ以上は無理なので、何とか自分を納得させようとしている状態だから。

問4 — 線③「言い訳」の内容にあてはまる部分をぬき出し、はじめとおわりの5字を答えなさい。

問5 — 線④・⑦の「それ」のさすものを、それぞれ答えなさい。

問6 線⑤「なぜか過去の出来事が次から次へと脳りによみがえってきた」とありますが、この時の筆者の状態にあ

てはまるものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 苦しい状況からぬけ出られた経験を思い出すことで、無意識のうちに自分を勇気づけている。
イ 現在が苦しい状況にあるので、楽しい思い出にふけることで今の状況を忘れようとしている。
ウ この暖かいコンロの火が、現在を楽しんでいる、甘美な時間にかえてしまい、今をたのしんでいる。
エ これからの見通しが立たないようなので、過去の出来事を思い出すことで時を過ごしている。

問7 線⑥「勇気」と文中で対照的に使われていることばを答えなさい。

問8 (1) 線⑧「どん底の状態」とありますが、その状態をまとめた次の文の A・B にあてはまること

ばを、それぞれ指定の字数で、文章の後半の『少しづつ、』と思った。』からぬき出しなさい。

先の見通しは立たず、 A (7字) ので、何もかも気に入らず、うとましく感じられ、もうここで旅を

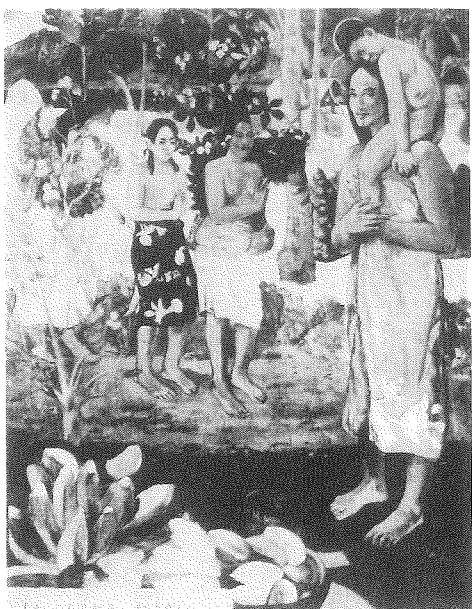
B (2字) しようと考えている状態。

(2) 筆者は、「どん底の状態」になった理由をどのように考えていますか。文章の後半の『少しづつ、』と思った。』から15字以内でぬき出しなさい。

問9 文中「外にはエスキモーの声ももう聞こえなかった。」という一文がぬけています。 I V のどこに入りますか、記号で答えなさい。

3 次の(A)・(B)の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数については、「、」「や」「。」も一字に数えます。)

(A)



《ゴーガン》 オラ-ナマリヤ

ゴーガン(フランスの画家)が画家になったのは、すでにかなり年とつてからのことですが、この異端の画家はそれ以後徹底的に自己の選んだ道に突入し、妻子をすてたのみならず、祖国をもすてて南洋諸島にわたり、土人(その土地に育った人。原文を尊重し、表記はそのままにしてあります。)の中に混じって生活したのです。つまりらん熟した文化生活をのがれて、この大自然の中の原始的な生活が、彼には強い魅力となつたのです。そこにはたくましい土人の生命があり、肉体があり、そして祈りもあつたのです。なにか不思議な神秘的な人間の運命を感じさせるものもありました。つまり、

まだ汚されたことのない無く(汚れがなく)な大地と、生きるものの純な詩があり、夢もあつたわけです。ゴーガンはそのような天地に生きることの喜びを知って、もはや文明の地に帰ろうとはしなかったのです。しかし、この原始的な生活も決して楽ではなく、貧困の中に病苦をになつ(引き)て悲惨な(痛み)死を迎えるに至つたのです。

しかし、この南洋における生活は彼にたくましい制作意欲をあおりたて、多数の作品を生み出したものです。ここに見る作品も、タヒチ島の生活から生まれたもので、色の使い方は印象派の手法を土台とし、原色の対比を基礎としていますが、日本の浮世絵の影響をうけて以後、図柄のつくり方が(が)的となり、色面を並列して、時には装飾的にさえ見える画風になってきました。そういう色彩の効果だけでなく、しだいに彼の作品には幻想的な要素が加わり、

詩的な感じがこもってきています。

(B)



《ゴッホ》 日本の女

ゴッホ（オランダの生まれ。フラ）は浮世絵を見てから非常に日本に
対するあこがれを抱いて、日本を美しい夢の国のように想像して
いたようです。彼がアルルの町にはじめていつた時、その明るい南仏（南部フ）
と言ったということです。それほど日本を愛したのも、浮世絵の美しさにうたれたからでした。それで彼は何枚か浮世絵
を模写したものです。これもその一つで、かなり忠実に模写しています。一体ゴッホのみならず、印象派の画家たちは浮
世絵を見て感心したのは、第一にその色彩が、いかにも美しかったからですが、そのみならず大胆な構図のとり方や、
特に平面的な表わし方が興味深かったようです。それまでは立体的な見方、遠近、奥行を厳しく追求する立体の構造のみ
に努力してきたヨーロッパの画家たちが、そういうことにかまわず、平面的に表現する日本の画法を見て、全く驚いた
のです。ゴーガンもこれにはずい分感心しましたが、ゴッホも劣らず影響をうけたのでした。オランダを去って、フラン
スに来てから印象派の影響をうけ、ゴッホの色彩は明るくなり、アルルに移ってからは、ますます鮮麗な（あざやかで、
人目を引く）



《ゴッホ》 ルーランの肖像

（富永惣一「近代絵画」より。一部表記を改めたところがあります。）

色の対比を見せてきました。この「ルーランの肖像」も、目のさめるような明快な色合いで描かれた立派な肖像画です。
歯切れのいい筆使いで純粋な色を生かし、色と色との対比関係で少しのにごりもない純度の高い色の世界を築きます。そ
れは南欧（南ヨーロッパ）の明るい空でのみ見られるような純明な（まじりけがなく、明快なこと）色です。赤に対して緑や青の対比関係をあく
まではずきりとつかって、いよいよ色の効果を最高度に発揮します。もし、色の構造を勉強したいなら、ゴッホの作品を
見ることです。そこには色の文法といっても良いような原則が実にはつきりと示されています。ことにフランスに行つて
以後五カ年間に於いて色の世界の極地に達したといつてよいでしょう。

* 異端……その時代・社会で正統の反対のこと

らん熟……文化などが、極度に発達すること

印象派……外形をうつすよりも、物の印象を強調して表現しようとするグループ

浮世絵……江戸時代におこったしばいの俳優の似顔などを題材にしたもの、版画が世界的に有名

模写……本物の通りにうつすこと

(A) 文について

問1 ———線①「それ以後」・③「そこ」のさすものを答えなさい。

問2 ———線②「彼には強い魅力となったのです」とありますが、『強い魅力』となったものが、一文でまとめられているところをぬき出し、はじめの5字を答えなさい。

問3 ———線④「文明の地」に属するものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア らん熟した文化生活
- イ タヒチ島
- ウ 神秘的な人間の運命
- エ 祖国
- オ 原始的な生活

問4 文中の ☐ にあてはまることばを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 原始
- イ 立体
- ウ 平面
- エ 効果
- オ 遠近

(B) 文について

問1 ———線①「彼は何枚か浮世絵を模写した」とありますが、その理由をまとめた次の文の ☐ A ☐ B ☐ C にあてはまることばを、それぞれ指定の字数で文中からぬき出しなさい。

浮世絵の ☐ A (2字) や ☐ B (5字) や ☐ C (8字) に美や興味を感じたから。

問2 ———線②「平面的に表現する日本の画法」とありますが、「平面的に表現する」と対照的な意味を持つ表現を20字で文中からぬき出しなさい。

問3 ———線③「それ」・④「そこ」のさすものを答えなさい。

問4 ———線⑤「色の文法といっても良いような原則」とは、文中では、具体的にどのように述べられていますか。35字以内でまとめなさい。

得点

受験番号

氏名

1

(1)

①	(んで	②	③	④	⑤
---	-----	---	---	---	---

(2)

①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---

(3)

問1 (a)	(b)	問2 (a)	(b)	問3 (a)
-----------	-----	-----------	-----	-----------

(4)

問1	問2 (a)	(b)	問3 (a)	(b)
----	-----------	-----	-----------	-----

2

問1

A	B
---	---

問2

--

問3

問4 はじめ	おわり
-----------	-----

問5

④	⑦
---	---

問6

問7

問8

(1) A	B
----------	---

(2)

--

問9

--

(A) 3

問1

①	③
---	---

問2

問3	問4
----	----

(B)

問1

A	B	C
---	---	---

問2

--

問3

③	④
---	---

問4

--